

武蔵野日曜聖書講筵 復活節祈禱会

靈光

——コリント前第15章3～13節、コロサイ第1章、2章——

1983年4月3日

小池辰雄

祈の人・即神の人・聖霊の人 十字架聖霊一如 キリストの霊生の顕現 逆理・逆道 祈り

【コリント前書15章】

³わが第一に汝らに伝えしは、我が受けし所にして、キリスト聖書に应じて我らの罪のために死に、⁴また葬られ、聖書に应じて三日めに甦えり、⁵ケパに現れ、後に十二弟子に現れ給いし事なり。⁶次に五百人以上の兄弟に同時にあらわれ給えり。その中には既に眠りたる者もあれど、多くは今なお世にあり。⁷次にヤコブに現れ、次にすべての使徒に現れ、⁸最終には月足らぬ者のごとき我にも現れ給えり。……¹²キリストは死人の中より甦えり給えりと宣べ伝うるに、汝等のうちに、死人の復活なしと云う者のあるは何ぞや。¹³もし死人の復活なくば、キリストもまた甦えり給わざりしならん。

【コロサイ書1章】

¹⁹神は凡ての満ち足れる徳を彼に宿して、²⁰その十字架の血によりて平和をなし、或は地にあるもの、或は天にあるもの、万の物をして己と和らがしむるを善しとし給いたればなり。……²⁷神は聖徒をして異邦人の中なるこの奥義の栄光の富の如何ばかりなるかを知らしめんと欲し給えり、此の奥義は汝らの中に在すキリストにして栄光の望みなり。²⁸我らは此のキリストを伝え、知慧を尽して凡ての人を訓戒し、凡ての人を教う。これ凡ての人をしてキリストに在り、全くなりて神の前に立つことを得しめん為なり。²⁹われ之がために我が衷に能力をもて働き給うものの活動にしたがい、力を尽して労するなり。

【コロサイ書2章】

⁸なんじら心すべし、恐らくはキリストに従わずして人の言伝と世の小学とに従い、人を惑す虚しき哲学をもて汝らを奪い去る者あらん。⁹それ神の満ち足れる徳はことごとく形体をなしてキリストに宿れり。



●祈の人・即神の人・聖霊の人

パウロが切々と甦りのキリストを告白しているわけです。

「³わが第一に汝らに伝えしは、我が受けし所にして、キリスト聖書に应じて我らの罪のために死に、

「キリストの死は正に我らの罪のためであつた」と、3節にある。

⁴また葬られ、聖書に应じて三日めに甦えり、⁵ケパに現れ、後に十二弟子に現れ給いし事なり。」(コリント前15・3～5)

そして、8節に、

「⁸最終には月足らぬ者の^{いやはて}ごとき我にも現れ給えり。」(コリント前15・8)

と。これはダマスコ途上の顕現をいうわけです。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか!」

という。キリストの霊光に打たれたわけです。

キリストは祈りの人です。

「キリストは如何なるひとであつたか。ただ一つの答案を書け」

といったらば、

「祈りの人であつた」

と、こう書く。いろいろな言い方があるでしょうね。しかし、キリストは祈りの人であつた。キリストが祈りの人であるということは、即神、神に即していた即神の人。祈りにおいて神と即するわけです。即しないような祈りは、いくら祈りといつても空しい。そして、

「即神のひと」

ということを別な言葉でいうと、「聖霊の人」ということ。なぜ、即神できているかという、聖霊が無ければ即神できないですから。

いかなる現実であつたかという、父子一如の現実であつた。父子一如の現実である、これが本当の現^{うつ}です。だから、これは本当の霊止^{ひと}なんです、霊が止どまっている。神霊が止どまっている。だから、彼の言葉は直ちに神の言葉である。彼の行為は直ちに神の行為である。神の行為が現^{うつ}じたにすぎない。神の言が吐かれたにすぎないと言つてもいい。これはもう、東西古今にただキリストあるのみ。その本^{もと}を尋ねれば、本当に祈りのひとであつた。お願いではないですよ、この祈りは。

「汝の御力、御生命、御言が我に成れ」

という祈りです。こつち側のお願ひではない。

「本願成れかし。本願が我を貫け」

という祈りです。こつちは正に無者であります。

私みたいな破れ器が——皆さんの感話を聞いていると、いろいろな状況のこととも言つてらつしやる。いいですよ、どんな状況でも——しかし、状況や、どの程度であるとか、そ



いうことはもう段々問題でなくなりますから。ゴタゴタの中に、破れの中に、始末のつかない中に、自己嫌悪の中に——どこでもいい——その中に顕然と現れるものがある、こちら側の如何にかかわらず…(異言)…。それを受けとりなさい！何を問題にしているか！もう、福音書のキリストはたまらんです、私は。その行為が、その言葉が烈しいほど、たまらんです。それが本当に力であることがわかってきた。こっちができるのできないの、判るの判らないのと、そんなことではない。

●十字架聖霊一如

私は今、本当に孤独です。いかなる神学者もわかってくれない。いいです、それで。この聖書でも——パウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブ——この使徒たちが本当にキリストに燃えていた、烈々と。そういう霊生のキリスト。地上にある時にそれがわからなかった。みんな躓いた。キリストはただ独りだった。けれども、その隠れていた躓きのキリスト、その霊生——「躓きの石」とイザヤ書にあるように——そのキリストの隠れていた霊生が、聖霊の生命が十字架を経て現れざるを得ない。その霊生がよめなかったから、キリストの復活に躓いた。わからない。

キリストが霊生をもつて顕現するくらい当然なことではない。至当なことではない。エリヤやエノクどころのさわざではない。

「この神殿が何十年かかって、私は三日で建てる」

と言ったのは何事であるか。

「活ける神殿、彼自身が現れる」

ということ。預言に躓いている。キリストは三度も言われた。直弟子たちがみんなこれに躓いた。現れてもまだ躓いた。

「それは本当か？」

と。この復活の甦りのキリストが本当であることは、

「今にお前たちにわからせてやる。聖霊が来れば、わかるぞ！」

ということ。ですから、パウロは、

「然るに我が今の如くなるは、神の恵みによるなり」

と。パウロは、「神の恵み」とか、「キリストの恩恵」という言葉を123回語っているそうです。絶対恩寵なんです、この恩寵は。恵みの内容は十字架聖霊一如の事態です。

パウロは今、私が言ったようなことをズバリと言っていない。

「¹²キリストは死人の中より甦えり給えりと宣べ伝うるに、汝等のうちに、死よみがえり人の復活なしと云う者のあるは何ぞや。¹³もし死人の復活なくば、キリストもまた甦えり給わざりしならん。」(コリント前15・12～13)

と。こんなようなことをいくら繰り返したって、しょうがないです。随分私は乱暴なこと



を言うけれどもね。

「キリストの復活くらい、これほど本当のことではない」

と言ってもらいたかった。これくらい至当なことではない。これが至当と判るためには、キリストの霊生がどんなに素晴らしいものであるかということが見えないうちはわからない。パウロ自身が躓いたんですから、仕方がない。キリストを信する者を迫害していたからね。だから、キリストの霊生がどんなものかということとは、ダマスコ途上で彼が実際体験せしめられた。引っくり返された。三日間どうにもならなくなった。アナニヤによつて聖霊のバプテスマを受けて初めて、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と。キリストの霊生がどんなに素晴らしいものであるか、キリストの霊光がどんなに素晴らしいものであるか。電気之光や太陽之光もかなわんです。我々は太陽之光で甦るわけにはいかない。キリストの霊之光に打たれたら、それはもう誰だつて参つてしまふです、本当に。私は特に「靈光」と題したのはその気持なんです。

●キリストの霊生の顕現

宗教には、よくこの「光」のことを言います、他の宗教でも。「お光さん」なんてのもある。キリストのは御霊之光だからね。キリストの全存在を貫かなければ、この霊光は私たちは受けるわけにはいかない。だから、キリストを通らない霊なんていったつて、これはダメです。聖霊はキリストのですから。神を全面的に受けたキリストですから。その御意も、その力も、その生命も、その光も、全部受けているのがこのキリストです。そのことはコロサイ書に書いてある。最も素晴らしいものは、肉の目には隠れている。肉の耳には隠れている。これを躓きという。

私たちはここに花を見る。この花を見るよりもつと明らかに見えるものは、この霊なるキリストです、明らかに実在するものは。世界は引っくり返つても、キリストは引っくり返らない。世界は失せても、キリストは失せない。

「わが言は永遠に立つ」

という。我という言葉は永遠に立つ。我々の望みはただキリストにだけかかることははつきりします。

「信仰と希望と愛は永遠である」

とパウロが言つた。コリント前書13章。コリント前書というのは凄いんだ。

真理も、キリストが「アーメン」——「真理」という字は「アーメン」という字——アーメンの主体なんだから、キリストは。望の主体も、キリストが望の主体なんです。キリストの他にいづくに我々の望みがあるか。

「ついにキリストの姿に化する」



ことが望みではないですか。それはキリストという主体があるからです。

愛は何ですか。キリスト自身が愛ではないですか。愛の権化ではないですか。だから、「信・望・愛」なんていったって、これは全部キリストのことを語っている。実はこれは分割できない。一如なんです。

「そのうち最も大なるものは愛なり」

とパウロが言った。それも勿論それでいいんですけども、この三者が絶対に大いなるものなんです。絶大なるものです。

復活というのは、霊生の顕現なんです。キリストが神から頂いている霊生の顕現です。

「われはアブラハムよりも前に在りしなり」

という。キリストは、具体的に我々と同じ形で現れて、危機的存在なんだ、肉なるキリストは。危機的存在ではあるが、しかし、それは本当に霊生を有っているから、もの凄い空を飛んでいる驚みtainなものだよ。飛行機はヘタすれば落ちる。けれども、キリストという霊の翼を持った飛行体は、どんな嵐にも落ちない。どんな嵐にもキリストの舟は引っくり返らなかった。大変な存在です。

まあそれをあなたの方、冥想してごらん。これを祈り入るという。祈り入ってごらん。グワーツと全身にももの凄い力がくるから。火の如くなるから。そういう祈りの中に入らなければダメですよ！ 個々の祈りなんかどこかへすっ飛んで行ってしまう。もう何がどうなっただっていいよと。私は今もう異言が爆発しそうですね、こらえている。

誰にどう思われても一向差し支えないです、私は。何と言われようと。使徒たちが、

「そっだー！」

と言っている。福音はそれだけの力を、光を持っています。この20世紀が引っくり返っても、我々は引っくり返りません。神の国を嗣ぎます。この十の召団は大変な存在になるんです。それだけの自覚ならざる自覚をしていただきたい。

「自分がどうだこうだ」

と、そんなことではない。いいね。青年諸君は特に深く祈り、烈々たる魂にならなければダメだよ。私は事実をもつて証明してやるから。

私は水戸の高等学校を出た。水戸の同窓会には私の書いた本を送っている。最近の会報に非常に驚いてこれを報告している人がある。全然知らない所で驚く人が出てくる。

●逆理・逆道

コロサイ書を開いてください。2章8節、

「⁸なんじら心すべし、恐らくはキリストに従わずして人の言伝と世の小学とに従い、人を惑す虚しき哲学をもて汝らを奪い去る者あらん。

そんなことがあってもいいよと。



9 それ神の満ち足れる徳は

これは本当は、「満ち満ちてゐる神性は」と訳した方がいくらいです。神の満ち満ちたところの神性、あるいは神性のプレローマは、神性の充満は、

ことごとく形体をなしてキリストに宿れり。」(コロサイ2・8～9)

キリストに宿る、キリストに住んでいる、キリストの中に。この9節は非常に凄い言葉です。

「一切、神の神性がキリストの中に形をなして充満している」

というんです。だから、

「お前たちはキリストに在つて、エン・クリストで満ち足れるのである」

ということですよ。そういう、私たちは霊生によつて、キリストの霊生で充満してしまう。

その同じようなことが、コロサイ書1章の19節に、

「19神は凡ての満ち足れる徳を彼に宿して、」(コロサイ1・19)

「徳」といったつて、ただ道徳の徳という意味ではないですよ、この「徳」という訳が困るんだけど。この神の姿、「エイコーン」が形をなしてキリストにおいて充満している事態を、これが本当に霊的実存の具体的な内容なんです。1章27節に、

「27神は聖徒をして異邦人の中なるこの奥義の栄光の富の如何ばかりなるかを

知らしめんと欲し給えり、此の奥義は汝らの中に在すキリストにして栄光の

望みなり。

ここにもちゃんと「望み」という字が出ています。

……29われ之がために我が衷に能力をもて働き給うものの活動にしたがい、

力を尽して労するなり。」(コロサイ1・27～29)

もの凄いことですね。

とにかく、皆さん、聖書を読みなさいよ。そうすると、自然に出てくるから。自分の好きなところを繰り返して読む。そして身につけてしまう。何しろ、「読んで分かった」ではダメなんです、身につけなくては。だから、ポケットに——私のはもうバラバラになった聖書が二、三冊ある——ポケットにつつこんである。あるいはノートの中に挟んでおく。みんなこれ身につけるためです。

エペソ、ピリピ、コロサイの三つの書簡を——一つ一つはそんなに長くないから——熟読してください。そうして、本当に読むことが直ちに祈りになりますから。もの凄い次元に入りますから。ここはもう最後にパウロがいよいよ殉教の死を遂げる前の獄中の書簡だからね。このパウロ書簡の手紙が世界の終わりまで語りかけてくる。

皆さんの生活そのものが、生きざまそのものが、証となる生き方が、これが本当の活字という、活ける文字という。

「汝らはキリストの書なり」

とパウロが言つたのはそのことです。



この中の大方のかたは余りお書きにならない。本なんか書かない。これは一流だからだよ。私みたいに書くのは二流、三流だ。第一流の人物は本を書かない。キリストも、ソクラテスも、孔子も。あなた方はキリストに私よりか近い。私みたいに書いているのはダメなんだ。本当だよ。これはやむを得ず書いているけれども、本当は書かない方がいい。あなた方も仕方がない、やむを得ずして読んでください。しかし、読む時には――私は本当にやむを得ずして書いた――私の文字の行間を読むような読み方をする。これはみんな私の手紙です。手紙だと思って読んでいただきたい。

もうそうなたら、本当にどんな現実も天国になつてしまふです、絶対に。行き詰まりを知らん。一番本当の道はこの逆理の道なんです。いわゆる論理に逆らっている。逆道、いつでもいいかな。パラドックスです。

「右の手の為すことを左の手に知らすな」

と。これも逆理なんです、本当は。それはまだ誰も言わんだろうね。「右の手の為すことを左の手に知らすな」ということは、左無き右ということですが、右といえば左があるんだけど、右も、右無き左。東無き西、西無き東。まだ東西なんていつているうちはダメなんだ。白隠の「せきしゅ隻手の音」というやつ。片一方の手だけで音がする。「無弦の琴の音」という。「啼かぬ鳥の声」という。みんなそういう世界、これは逆理の世界です。そういうものが、さきほど言った、自分の目で見えるのではない、キリストの目で見るという見方です。もうそういうことになったら、これはみんなどこから来るかというと、本当に祈り入る世界から全部それが出てきます。

● 祈り

では、6時半になりましたから、これから祈りましょう。

「はじめ我はおわり始なり終なり」

と、あなたの聖名でありました。この日、始めより終わりに至るまであなたご自身が御霊をもつて、聖言をもつて私たちに臨み、そして貫き、中に内住してください、全身をもつて聖名を讃え奉ります。

北は北海道、また栃木召団、また埼玉召団、東京召団、裾野召団、京都召団、奈良召団、大阪召団、岡山召団、鹿児島召団と、主さま、すべての召団は今日全存在をもつてあなたの聖霊にあずかり、聖名を讃えましたことを心から感謝いたします。聖名を讃美いたします。ハレルヤであります。この兄弟姉妹たちの一人びとりに今溢れているところの、このみ力、どうぞ、毎日毎日、現実となつて展開してください、願ひ奉ります。そして、あなたの証者としていよいよ展開して…(中略)…はい、祈りを静めよ。……本当に感謝です。皆さんはもう自然に爆発したから、これは本当に祈りです。聖名を讃えます。

では、召団讃歌A5「わがみ神よ」と聖歌623「いつかはしらねど」を歌いましょう。

